

Olive View Medical Center 研修を終えて

倉敷中央病院 総合診療科
栗山 明



米国内科学会カリフォルニア支部および日本支部のご高配を賜り、2014年11月に Olive View UCLA- Medical Center (OVMC) で臨床見学させていただきました。ここにご報告申し上げます。

今回の研修を私が希望した動機が二つありました。まず、米国の集中治療がどのようにされているのか知りたかったと思います。日本の集中治療は麻酔科が主導で行うことが多い現状があります。総合診療を背景にする集中治療医として、内科医が中心となって管理する他国の集中治療を知りたいと私は考えました。次に、日本ではまだ発展途上である総合診療を含めた内科全般に関して若手医師に施される教育の方法に興味がありました。以上を踏まえて、集中治療(Critical Care)を二週間、Internal Medicine を一週間余、および数日の Infectious Diseases の見学をさせていただきました。

最初に研修した集中治療室では、主に内科疾患の管理と一部外科疾患の周術期管理がなされました。朝から午後3年目と1年目の医師がチームを組んで患者の診察に当たり、評価と方針を決め、午前中をかけて行われるラウンドで指導医と方針の確認がなされました。ラウンドの途中では足を止めて、指導医が薬剤に関する最新のエビデンスについて言及したり、例えば呼吸生理のように計算式を必要とする理論を説明したりする様子が見られました。2週間で3人の指導医にご指導いただきましたが、指導の中では「最新のエビデンスでは～だが」「テキストには～のように書かれているが」「専門医試験問題を解く際には～と一応回答しなければならないが」という前置きを置いて、実臨床では別の方法を取らざるを得ないという話が時折ありました。理論とエビデンスが前提としてあるものの、米国の集中治療医が悩むところは私が知る臨床と変わらず、試行錯誤が必要に変わりないことを察して安堵しました。同時に、指導医独自の clinical pearl を伝授する様子に親近感を覚え、私も更なる研鑽をつみたいと啓発されました。出納管理に関しては比較的リベラル



であり、昇圧剤2剤を使うまでは動脈ラインを留置しないなど日本の集中治療の慣習とは異なる点もありました。

指導医とレジデントのディスカッションを通じて、日本と米国との教育スタイルの違いを目の当たりにしました。Internal Medicine や Infectious Diseases の病棟でのラウンド、毎朝行われる Morning Report では活発な

ディスカッションがなされていました。レジデントは指導医や他科の上級医とも対等に議論を交わしていました。指導医もレジデントを信頼し、その行動を評価して任せる様子が見られました。そして、彼らは概して議論を展開させられるコミュニケーションの能力が高いと感じました。日本の研修や教育を振り返り、米国のスタイルから学ばなければならないことは、1) 議題を共通のテーブルに乗せることで、建設的かつ円滑な対話が生まれること、2) 議論を持続させるための言葉の使い方や雰囲気作りを知ることで、そして3) 議論や教育は双方向的なもので、大前提としてまず相手の話を聞き対等に認めることではないかと強く感じました。彼らに比べて日本の研修医は手技を行う機会に恵まれています。医療はこれだけではありません。多職種・多くの人がかかわる医療では特定の個人の発言や志向、古き伝統だけに依存すべきではなく、議論を交わしてより良い方向性を決定することが必要です。当然のことのようにも思いますが、これがプロフェッショナリズムの一部かもしれないと感じました。

また Morning Report などのカンファレンスの中で大切なものは、議論の双方向性・積極性の他に、経験豊かな指導医の存在だと再認識しました。実際、カンファレンスを盛り上げ、実り多きものにしたのは指導医のリアルな経験や知識であり、clinical pearl であったと思います。日本ではカンファレンスを頻繁に行う余裕はなく、ケースカンファレンスに集まる者は比較的経験の似た者であることが少なくありません。指導医が教育カンファレンスに参加するだけの余裕を生み出すことは日本の現状では至難の業ではありますが、なお、病院をあげてのシステム作りと指導医たちの共通認識が必要だと思いました。

渡米する前に私が持った二つの動機は、今回のプログラムの中で完遂されたように思います。少なくとも自身と若手医師に対する教育の改善を欲する契機になりました。勿論、上記以外にも多くの学びがあり、啓発され、更に研鑽を積まなければならないと痛感した1ヶ月でもありました。私がこのプログラムを通じて啓発されたように、若手医師がこのプログラムに参加して啓発されること、そのためにこのプログラムが今後も存続してくれることを心から願ってやみません。

最後になりましたが、このような学習と啓発の機会をくださった ACP の先生がた、現地で私を支えてくださった Norman Belisle 氏および OVMC の先生がた、そして1ヶ月間一緒に過ごしてくださった牧石徹也先生に心からお礼を申し上げます。

